

A black cat with bright yellow eyes is sitting on a grey, textured rock. The cat is looking directly at the camera with a serious expression. The background is a light-colored, slightly blurred wall.

ぼくのともしだちには
フサフサのみみがある

衣玖矢曇

それはそれで

「あんこ、ご飯だよ～」僕はそう少し大きめの声を発した。

声は壁を弾き響し伝播し伝えるべき相手に伝わただろう。

「うしろにいるんだけど」そう背中から声が聞こえた。

僕はびっくりして振り向く。

そこには、いつもどおりふさふさの黒猫がいた。

「びっくりさせないでよ。」

「私にはびっくりさせる意図はないわ」そう言って彼女のご飯が盛られたお椀に近づく。

「あら、今日はモンパッチじゃないの？」彼女の語気には残念さがわずかに含まれている。

「いやぁ、ストックが切れちゃって、お母さんも忘れてたみたい」

「ストックとは、切れる前に補充しておくものよ、だからこそそのストックなのだから」

彼女は普段とは違うご飯を食べながら喋った。

「ごめんね、明日には買っておくからさ」

「別にいいわ、たまにはこういう味もいいかも」すかさずフォローが入る。

「あんこは優しいなぁ」

「うるさいわね、宿題終わったの？早めにやりなさいよ」彼女の目線はお椀へ再び向かう。

「やるよやるよ～」僕は彼女を背にリビングのテーブルへと向かう。

彼女のしっぽはフリフリと振られていた。

僕は宿題を取り出し、始めた。

同じ漢字を延々とノートに書き続ける。

さすがに飽きてくる。

すっとテーブルの上に食事を終えた彼女がジャンプしてきた。

「いつもいつも漢字をマス目に埋めていく、飽きないわねえ」

「僕はとっくのむかしに飽きてるよ」

「あら、あなた、とっくの昔なんて言えるほど年を重ねてないでしょ」

「それを言い出したらあんこなんてもっと重ねてないじゃん」

僕はちょっと言い返す。

「人間とは月日の重みが違うのよ」フフンと彼女はこちらを見る。

僕はまだ小学生だ。

それでも十年以上生きてる。

だから、生まれて数年の彼女には言われたくない。

彼女の名前は、あんこ。

黒い猫だけど、よく見るとあんこのような艶のある黒色だから。

拾って、お父さんとお母さんに飼っていいって言われたその日に名付けた。

「でも、説得するまでが大変だった」

「なんの話？」あんこのガラス球のような瞳がヌッと横から出てくる。

「ごめん、つい思っていたことが口に出ちゃった。」

「まあ確かに大変だったわね、そのために作戦会議なんどもやったのよね」

クスクスとあんこは思い出し笑いをする。

「あ、やっぱりバレてる？そうそうあの時のことを思い出していたんだよ。」

つづく

ぼちぼち

僕はあの日。。。

小学校に上がって間もない頃。

もう夏休みに入るもしれない、じわじわと夏が近づくそんな頃。

学校が終わって家に帰っていたとき、かすかに何か聞こえた。

もう一度よく耳を済ます。

静寂たゆたう水面をかすかな鳴き声がかき乱す。

明らかに幼いその鳴き声に胸のあたりが締め付けられる。

どうも、お化け屋敷とみんなに呼ばれているボロボロの家からその鳴き声は聞こえた。

僕は怖がりだから、そのボロボロの家に入る勇気はなかった。

だからといって、鳴き声を聞いてしまった以上聞かなかったことに出来る蛮勇さもなかった。

僕は周りを見渡し、自分以外に誰も居ないことを確認した。

そうだ、家に入らなくても庭からなら大丈夫だ。

雑草が自由に生い茂っている。

それをひとつひとつかき分けて入っていく。

虫や蜘蛛の巣なんかがあって気持ち悪かった。

でも、あの鳴き声が近づくに連れそんな気持ちは薄れていった。

暖かな日差しが広めの庭に差し込んでいた。

コンクリートで出来た小さなバルコニーにそれはいた。

ニーミー。

小さな声が訴えかけてる。

僕は恐る恐る近づく。

目がパチリと開き、二つのガラス球が僕を見る。

ミーー！！

ドキリとする。

「な、何？」思わず口に出す。

体中汚れてブルブル震えていたけど、僕は綺麗だと思った。

ニー！！ニー！！

必死にそれは訴えかけるようにないた。

僕はびっくりして思わず尻餅をつく。

するとふと背中に何かがあたった。

びっくるする。僕の後ろにはなにもないはずだ。

上を向く。

「やあ！！！！！」

白い顔に銀髪、炎のように赤い目を持つ女の人がいた。

「うわあああああああああ」

「うおおおおいなんだなんだ」女の人が狼狽えた。